

彼の音楽を彼が弾く



Izumi Tateno Birthday Concert 2024

館野泉 バースデー・コンサート

2024.11月4日(月・休)14:00開演 東京文化会館小ホール
2:00p.m., Monday, November 4, 2024 at Tokyo Bunkaikaikan Recital Hall

【主催】ジャパン・アーツ 【後援】フィンランド大使館 【協力】館野泉ファンクラブ

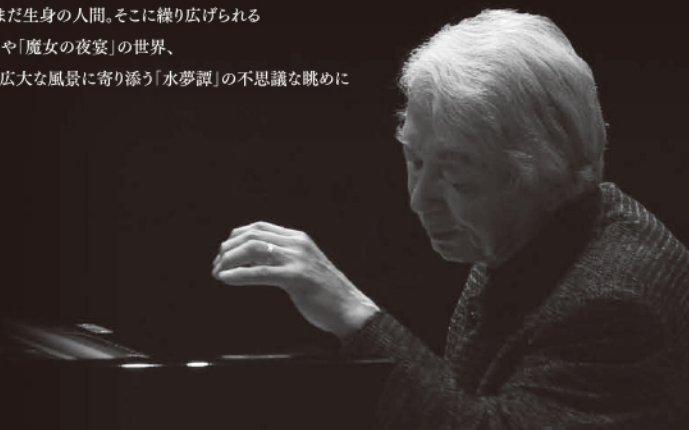
この11月10日で88歳になる。もはや立って歩行することは出来ず車椅子に頼らなければ動けないが、それでも春には岩手、青森、札幌、函館のツアーをしたし、佐賀や福井にも出かけ、8月はドイツ、フランス、ヘルシンキ、そして9月にはインド、ブータン、ネパールにも行った。感謝である。いつまでこの活動が出来るか、それは「神の味噌汁——かみのみぞしる」であるが、弾ける間は現役の活動を続けたいと思っている。今年のバースデーコンサートでは2つの委嘱作品を世界初演する。

ブエノスアイレス出身のパブロ・エスカンデにはこの10年間、毎年一曲の割りで作品を委嘱し、常に質の高く美しい作品を創作して頂いている。私が最も信頼し愛している作曲家のひとりでもある。アイデアも豊富で、一作ごとに新しい世界を創造してくれるので、その意味でも期待は大きい。前作の「Graffiti Area」では異色の画家Banksyの作品をテーマに据え、ヴァイオリンとピアノでスリリングな世界を描きだしてくれたし、三手ピアノの連弾曲「音の絵」ではエッシャー「爬虫類」、ルソー「夢」、ゴヤ「砂に埋もれた犬」、カンジンスキー「空の青」などの絵画とも連動した美しくも多彩な世界を見せてくれた。もし彼が大河ドラマの音楽を担当したらきっと素晴らしいものになるだろうという想いも後押しして、今回の委嘱になったのだが、私が提示したのはピアノ一台によるオペラのようなピアノ作品だった。そしてテーマはスペインの画家ゴヤ。それも宮廷画家としての華やかな時代でなく、40歳すぎて聾者になり「黒の時代」という、まったく違う世界を亡くなるまで書き続けた執念の世界である。エスカンデはゴヤの他にもうひとつ、オスカー・ワイルドの「ナイチンゲールと薔薇の花」を作曲したいと希望した。どちらも女優の元田牧子さんの朗読と共に演じられるので楽しみにして頂きたい。

もうひとりの作曲家平野一郎は今まさに円熟期を迎えた人。最近では「鬼の生活」「鬼の学校」の二つの大作を書いて頂いた。特に「鬼の学校」は演奏に45分かかかる大曲でありながら、飽きさせない新鮮なユーモア、生命感、ヴィジュアルな演劇性、更には言えば漫画的ともいえる各楽章に魅了され、全国で16公演が行われたくらいの大ヒット作となった。しかし今度は鬼とは別れ、琵琶、尺八、笙、胡弓、箏、打物などの邦楽器とピアノ(洋琴)が大きなヤポネシア空間で出会い調和するのか反発し合うのか溶け合いつつそれぞれが我が道をいくのか全く予測がつかない。いずれはヤポネシアに溶けこんでいくのであろうが、まだどうなるか分からないのである。洋琴を奏でる泉もまだ若い青年で先行き知らずでも好奇心旺盛に活躍するのだ。

「両手とか片手で弾くという次元を超越し、変幻自在の「音色の対位法」といわれる境地に達し「磨き抜かれ澄みわたる音色」とも喩えられるなど仙人になったようだが、まだまだ生身の人間。そこに繰り広げられる「ナイチンゲールと薔薇の花」や「魔女の夜宴」の世界、そして悠然たる静かな強さと広大な風景に寄り添う「水夢譚」の不思議な眺めに目と耳を凝らして頂きたい。

館野 泉



Program

「館野泉左手の文庫」助成による委嘱作・世界初演
(World Premiere, Dedicated to Izumi Tateno)

パブロ・エスカンデ:
Pablo ESCANDE:

ナイチンゲールと薔薇の花(オスカー・ワイルド)
The Nightingale and the Rose by Oscar Wilde

魔女の夜宴(ゴヤを描く)
El aquelarre, Pintando a Goya

ピアノ: 館野泉 (Izumi Tateno) 朗読: 元田牧子 (Makiko Motoda)

平野 一郎:
HIRANO Ichirō:
すむむたん
水夢譚
Suwi-Mu-Tan

[WaterDreamHistory]

洋琴・笙・尺八・胡弓・琵琶・箏と打物に依るヤポネシア山水譜
Yaponesian Soundscape for piano, shō, shakuhachi, kokyū, biwa, koto and percussion
2024

館野泉とヤポネシアの精霊に捧ぐ
Dedicated to TATENŌ Izumi & Yaponesian Spirits

- I: 湖 Lake
- II: 岸 Shore
- III: 野 Field
- IV: 森 Forest
- V: 谷 Valley
- VI: 泉 Spring
- VII: 山 Mountain
- VIII: 丘 Hill
- IX: 河 River
- X: 海 Ocean
- XI: 淵 Avis
- XII: 洞 Cave
- XIII: 天 Sky
- XIV: 霧 Mist
- XV: 湖 Lake

洋琴: 館野泉 (Izumi Tateno)

笙: 中村華子 (Hanako Nakamura) 尺八: 田野村聡 (Soh Tanomura)

胡弓: 木場大輔 (Daisuke Kiba) 琵琶: 久保田晶子 (Akiko Kubota)

箏(十三絃): 竹澤悦子 (Etsuko Takezawa) 打物: 池上英樹 (Hideki Ikegami)

パブロ・エスカンデ:

ナイチンゲールと薔薇の花(オスカー・ワイルド)

魔女の夜宴(ゴヤを描く)

今回、館野氏から作曲の依頼を受けたとき、私はこれまでと同じように光栄に思うのと同時に、彼のために様々な編成で何曲作曲してきたかを確認したくなった(ピアノ・ソロ3曲、3手の連弾1曲、他の楽器との二重奏3曲、大編成の八重奏1曲、オーケストラとピアノのための作品2曲)。それから、16年前の秋に息子さんのヤンネ氏と京都市街でコーヒーを飲みながら、ヴァイオリンと左手のピアノのための小品を作曲してほしいと初めて依頼を受けたことも思い出した。その後、私は片手だけで奏されるピアノについて、どうすれば充実した作品を作れるのか、しばらく考え続けた。それが始まりだった。

館野氏の依頼は、いつもアイデアにあふれている。今回は、オペラのようなものを25分くらいで作ってほしいとの要望だった。「たとえば……画家ゴヤの生涯」……と彼は言った。ゴヤが彼の好きな画家の一人であることはすでに知っていたので、彼のアイデアを汲むことにした。私にはもうひとつ音楽にしたい物語があった。オスカー・ワイルドの童話「ナイチンゲールと薔薇の花」だ。少し異なるアプローチで2つの作品を作れるのではないかと考えた。私はこの2つの作品で、オペラのようなものに近づけるために、語りを入れたかった。

私は、詩人たちが書いたテキストを通してゴヤの生涯が語られ、ピアノが奏でる音楽により(時に一緒に、時に別々に)表現がより豊かに観客へ伝わることを想像した。時間はかかったが、フランスの詩人T.ゴージェ、C.ボードレル、スペインの詩人M.マチャドによるゴヤについての素晴らしいテキストを見つけた。私は、それらのテキストをゴヤの長い生涯の時系列に並べて、そのテキストにそって音楽を作った。

朗読を伴わないピアノ・ソロは、スペインで古くから親しまれてきたギター音楽のようでもあり、直前に語られたテキストとの直接的な関連性を示す。その代わり、朗読とともにある音楽は、繰り返される1つの短いテーマのバリエーションとした。

ゴヤの創作スタイルは長年にわたり進化を続け、創作と自己改革を決して止めなかった(……いま、私たちの目の前にもその良い例がおられる!……)

『魔女の夜宴(ゴヤを描く)』ではピアノがメインで、音楽的な物語が添えられているのに対し、オスカー・ワイルドの「ナイチンゲールと薔薇の花」は、朗読がメインで(物語は音楽がなくてもそれだけで成立するほど強烈)、ピアノは伴奏の役目ともなる。音楽は、ほとんどミ単位でテキストにフィットしているため、おそらくハーサルも容易ではないだろう。

すべての登場人物にはそれぞれのテーマがあり、ストーリーの展開に応じて繰り返されたり、物語の中の一部の人物のように、一度しか登場しないテーマもある。

ナイチンゲール自身が犠牲になる場面では、ピアノは物語とは別の新しいテーマを持っている。その部分のピアノはとても重要な役割を果たす。

私はこの物語を、影で(多くの場合、認識されない)助ける人々の比喩として捉えている。

ピアノが伝えられないことが声で伝え、その逆もまたしかり……音楽はしばしば言葉よりも多くのことを語り伝えることができる。どちらの芸術も、私たちの心に届けようとする最終ゴールに向けて互いに支え合っているのだ。(パブロ・エスカンデ)

パブロ・エスカンデ(作曲家)

1971年アルゼンチン生まれ。ブエノスアイレス音楽院、アムステルダム音楽院作曲科卒業。2008年アメリカ・アリエノール作曲コンクールにて名誉賞を受賞。2016年イタリア・ノヴァーラ音楽院作曲コンクールにて作曲賞受賞。2012年より日本在住。国際的な作曲活動に加えて、映画曲、チェンバロ奏者、指揮者など多彩な活動に注目をあびる。館野氏の左手のために、「アンティゴナス」「チェスの対局」「アヴェ・フェニックス」「松尾芭蕉による3つの俳句」「悦楽の園」など、独奏曲、室内楽、協奏曲作品を献呈している。

平野 一郎:

すむむたん
水夢譚

洋琴・笙・尺八・胡弓・琵琶・箏と打物に依るヤポネシア山水譚

「精霊の海」(2011)「微笑ノ樹」(2012)「星廻ノ夜」(2014)「鬼の生活」(2021)「鬼の学校」(2022)に続く「水夢譚」(2024)は館野泉さんからの6度目の委嘱作品となる。「平野さん、邦楽器とピアノが合奏する曲どう思う?」と最初にさりげなく尋ねられたのは確か2022年6月、東京文化会館での「鬼の生活」の上演後の打ち上げの席だった。「鬼の学校」本格着手直前の時期で折角のチャンスのはずが何故か不思議に気乗りせず「単に“和”と“洋”でコラボレーションしました、って感じになったりする」と勿体ないですよね」とか何とか変な応答で結局お茶を濁したのを覚えている。

2023年4月の終わり、館野泉さん米寿記念演奏会シリーズの始まりとなる札幌公演＝「鬼の学校」北海道初演が迫って来た。前年には南相馬・名古屋・東京と初演に立ち会ったので、この年のツアーは「子離れ」して遠くから見守るつもりだったのが、いよいよ近づくにつれて、その冬の予期せぬ喪失の後の最初の機会である事を想い、どうしても、と思い詰めて、公演3日前に急遽北海道行きを決めた。公演前日は車を借りて「蝦夷地」の円空佛を巡った。ポロ湖畔に建てられた新しい国立の施設にも立ち寄り、真新しい門から「内に入る」や否や、そこには遙か古の原野が広がり、むしろ本当の「外に出た」のだと悟る、という不思議な感覚を得た。翌日胸を打つ公演の後のレセプションの最中に向かいに座った館野さんから「平野さん、前に話した邦楽器とピアノの曲を作ること、今どう思うかな?」と再び尋ねられた。文字通りその瞬間、自分の脳裏に若き館野泉青年がずっと現れ、鏡のように開いた湖上から原初の日本列島の底に隈なく広がる水の異界を覗き込んで、辺りをぼう々と取り囲む異形たちと言葉に依らない不思議な対話を波紋のように交わしている様子が浮かんだ。「出ます!」と即座に応えた。

それから夢中で様々な想を練るうち、程なくその新作は「水夢譚」という名を得た。ヤポネシアの海岸へ永劫に打ち寄せる幾重もの波に乗って流れつき、やがて土着した人や楽器がこの地の神や精霊と交歓しながら先住後来共々に相見えて軋みあい融けあい、妙なる協和と不協和を大いなる鈴のように鳴り響かせる。目下最後の波に乗り洋琴たずさえ現れた青年は、太古のヤポネシアに辿り着いた清新なる来訪者。特有の風土が織りなす山水へと次第に解け込み、無数の人・神・精霊たちと出逢い愉しみ別れ哀しみ、驚くべき魂の遍歴を重ねていく旅人である……

そんな現実に導かれた「水夢譚」は、いつにも増して長い時間の中で無数の共時性に眩暈させられては何度も中断を挟みつつ、ゆっくりゆっくり生まれてきた。南の端から北の果てへ進む船が青黒い大波に揺られ吞まれて遂には沈む、という奇妙な夢を何度も見た。産みの苦しみ、殯の傷みを経て、浄められてゆく響きと調べ。非日常な日常のかけがえなく美しい悲しみに浸されたそれは一つ残らず楽譜へと沁み込んでいった。諭えるなら、凡ゆる人のもっとも私的な体験がそのまま甞る風土・文化の・民族の物語と重なる、今は見えなくなった全ての尊い存在を偲ぶ時空が現れた、と感じている。

夏の終わりの2024年9月9日、「水夢譚」は完成した。

曲は旅人の道程に沿うように連続する15の場面からなる。

以下は、音楽の視る夢に導かれるまま自動書記された作曲者の覚え書き。

- I: 湖 Lake 邂逅。風いだ湖面を覗きこみ耳を澄ます旅人の内なる声次第に漣を起し、太古の精霊を呼び覚ます。
- II: 岸 Shore 対話。精霊たちはまちまちの言葉によらぬ言葉を通して交信する。
- III: 野 field 行列。来訪者を伴って森の聖地へと野を渡る厳かに列に、道の辺の人々神々が三々五々と加わって、いつしか長い大群衆の遊行となる。
- IV: 森 Forest 参集。聖地に集った共々の騒めきを森の老翁の杖が宥めると、忘れられた踊り歌の一節が大気の中で微かに甦る。
- V: 谷 Valley 結界。一陣の魔風が空気を頼むせ、靈気の濃淡で聖別される見えない境を形作る。
- VI: 泉 Spring 秘儀。谷の奥に渾々と湧く泉の方へ促された旅人は巫さながらの姿草で、何故か識っていた太古より密か

に伝わる水の呪術を執り行う。

VII: 山 Mountain 顕現。閃光と雷鳴が空を切り裂くと見晴るかす山上に畏るべき最高神の出現が確と兆す。

VIII: 丘 Hill 饗宴。奇蹟を目の当たりにした群衆は俄かに歡び溢れ、来訪神たる旅人を敬待する宴へとなだれ込み、人・神・精霊あい交ざっていつ終わるともなく呑み喰い笑い歌い踊る。

IX: 河 River 舟行。賑わいの最中にも傍らの細い河には刳舟が準備され、皆は宴の鎮まりと共に順々に乗り込んで、何処へ向かうか、やがてゆるゆると漕ぎ出だす。

X: 海 Ocean 波瀾。進むに従い流れがどんどん広くなると舟はいよいよ大きくなって、気づけば緑の大河の川裾から青黒い大海の荒波へと船先を突っ込み、ますます波は吹き雲は沸き風は荒れ、遂にはけたたましい疾風怒涛に翻弄される。

XI: 淵 Avis 沈潜。聳え立つ巨壁の如き最後の大浪に攫われた舟は渦巻く水に呑み込まれて、轟々と奈落の底へ沈み墜ちる。

XII: 洞 Cave 哀情。懼ろしい闇の静けさに包まれた水底にぼっかり空いた横穴を辿ると、無数の亡き骸が眠る天然の墓処に到り、見えなくなった者たちの悼みあう慟哭が遠近の波音のように寄せ返す。

XIII: 天 Sky 浄化。肉体を離れた魂たちは、洞窟の奥から天へと続く通路に吸い上げられるように、虹の光を纏いながら駕となって昇って行く。

XIV: 霧 Mist 廻想。濃霧の中に行んでふと我に返った旅人は、憶い起こす毎に片端からほろほろと毀れ雲散霧消する記憶を夢中で探り、辛うじて心に刻まれた印を見つけては言葉の破片を拾い集める。

XV: 湖 Lake 出立。霧が晴れると、沙上に立ち意を決した旅人の眼前に、原初の湖が広がっている。 (平野一郎)

※ヤポネシア【Japonesia】とは、第2次世界大戦末期に南島に暮らし敗戦を迎え遂に出撃しなかった元特攻隊長の幻想作家・鳥尾敏雄氏の考案により20世紀中葉に生じた概念。地形・風土を表すものとしては千島から琉球弧に及ぶ広義の日本列島を指すと共に、太古よりの地に根をきた人々の民族的・文化的な多源性・多様性への志向と探求を象徴する語ともなっている。21世紀も5分の1を過ぎた今、ヤポネシア【Yaponesia】人の起源と成立を解明するべくヤポネシアゲグムの学術研究が本格的に開始されている。

平野一郎(作曲家)

丹後國宮津生。2001年より作曲活動を本格開始、京都を拠点に日本の風土や伝承に根差した創作を展開。響きや調べ、声と言葉の根源を探ね、失われた身体性・全人性を呼び覚ます音楽世界を志す。日本交響楽振興財団作曲賞最上位・日本財団特別奨励賞、青山音楽賞、京都市芸術新人賞、現音賞、藤堂音楽賞、京都府文化賞奨励賞等受賞。ISCM世界音楽の日々2008入選・参加。11年モノオペラ(邪宗門)初演。館野泉左手の文庫委嘱の諸作をはじめ、四季の四部作(吉川真澄)純多羅(大萩康司)ピアノ/ソナタ(光人彷徨)(イリナ・メジュエワ)龍/経(IMAGINARC)騎宮交響曲(芦屋交響楽団)八幡大鐘起(やわた市民音楽祭)胡絃乱舞(国立劇場)とこのはる(森の会)額印・宝船(日本音楽集団)等委嘱作品多数。17年より出雲芸術アカデミー・コンポーザー・インレジデンスとして「道作交響神樂」(全9部作/管弦楽+声楽)進行中、19年NHK-BS8K(落慶~奈良・興福寺)音楽制作、22年多和田葉子書き下し台本によるオペラ(あの町は今日もお祭り)(全5幕/国立市)初演。現在は東京にも新拠点を構え活動の領域を更に広げ深めている。

Profile



館野泉 Izumi Tateno (ピアノ/洋琴, Piano)

今年満88歳を迎えるクラシック界のレジェンド。領域に捉われず、分野にこだわらず、常に新鮮な視点で演奏芸術の可能性を広げ不動の地位を築く。2002年に脳溢血で倒れ右半身不随となるも、しなやかにその運命を受けとめ、「左手のピアニスト」として活動を再開。尽きることのない情熱を、一層音楽の探求に傾け、独自のジャンルを切り開いた。“館野泉の左手”のために捧げられた作品は、10ヶ国の作曲家により、ソロ・室内楽・協奏曲・編曲の分野にわたり130曲をこえる。もはや「左手」のこだわりなど必要ない、身体を超える境地に至った「真の巨匠」の風格は、揺るぎない信念とひたむきな姿がもたらす、最大の魅力である。

元田牧子 Makiko Motoda (朗読, declamation)

東京都出身。武蔵野音楽大学卒業。オリオンズベルト所属。歌の中のドラマ性に興味を持ち20代で演劇の世界へ。舞台、映像作品等ジャンルを問わず個性豊かな役で活躍。近年の主な出演作に、舞台『雨』(こまつ屋)『時代劇PRINCESS TOYOTOMI』、映画『老後の資金がありません!』『九十歳。何がめでたい』などがある。

中村華子 Hanako Nakamura (笙, shō)

国立音楽大学音楽学学科卒業。笙を宮田まゆみ、多忠輝、雅楽合奏を芝祐靖の各氏に師事。2006年度文化庁新進芸術家国内研修員。「伶楽舎」メンバーとして活動する他、「Shogirls」「雅楽三味中村さんち」「どんぶらこ」などのユニットでの活動や、笙のソロ作品やアンサンブル作品の初演や他ジャンルの芸術とのコラボレーションも多い。(株)BLUESHEET所属 <https://hanakonakamura.b-sheet.jp/>

田野村聡 Soh Tanomura (尺八, shakuhachi)

岡山県岡山市出身。鳥根大学総合理工学部卒。18歳より尺八を始め、筑秀月、田辺冽山、田辺嶺山、菅原久仁義の各氏に師事。日本音楽集団常任理事。日本尺八演奏家ネットワーク理事。国内外での演奏活動の他、各種メディア出演やレコーディング参加、2020東京パラリンピック開会式出演等、幅広いフィールドで活躍。

木場大輔 Daisuke Kiba (胡弓, kokyū)

日本の擦弦楽器・胡弓の専門奏者。古典から現代邦楽、異分野との共演、四絃胡弓の開発、作曲などを通じて、胡弓の独奏楽器としての可能性を追求している。2021年より、胡弓リサイタルを毎年開催。舞台・メディア出演や映画・ドラマ・アニメなど劇伴録音多数。「木場大輔胡弓の会」【絹擦糸】代表。

久保田晶子 Akiko Kubota (琵琶, biwa)

平家物語などの古典曲はもちろん、童話や民話、落語を元に新作の語り作品を創作、自演もしている。アニメ・テレビ音楽の録音、劇中音楽への参加、アンサンブル演奏まで活動は多岐にわたる。国外オーケストラと武満徹作品のソリストとして共演するなど、海外での活動も多数。2019年琵琶楽コンクール第一位。文部科学大臣賞。

竹澤悦子 Etsuko Takezawa (箏, koto)

石川県出身、東京藝術大学音楽学部卒業。1987年沢井合奏団アジア、ヨーロッパ5カ国ツアーでデビュー。1993年結成のKOTO VORTEXで注目を集め2009年クロスカルテット招聘によりNYカーネギーホール公演。2010年箏協奏曲初演。2013ソロアルバム発表。2020年「浪曲地歌・相撲もの」制作開始。福島大学他、非常勤講師を歴任。沢井箏曲院教授。

池上英樹 Hideki Ikegami (打物, percussion)

第46回ミュンヘン国際音楽コンクール最高位ほか受賞歴多数。フランスとドイツに留学。ペルクット唱法を基盤にしたテクニックを打楽器で実践。フラメンコ舞踊を学び、常に新しい打楽器の可能性を模索している。2014年より打楽器を中心にダンスパフォーマンス、歌などを融合させた自作自演の舞台<MOSAIC=モザイク>を発表し始める。日本を代表する打楽器奏者。